
SWORD ART ONLINE ~ 剣より銃を愛する者 ~

hedgehog

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SWORD ART ONLINE 〈剣より銃を愛する者〉

【Nコード】

N2996Z

【作者名】

hedgghog

【あらすじ】

浮遊城アインクラッドにて新たなユニークスキル使いが現れる。その者は、剣よりも銃を愛するようになる。オリ主人公ハヤテによる物語……

この小説は川原 礫先生のソードアート・オンラインの二次創作小説です。この作品は基本原作にそって書くつもりです。オリジナルの展開もある予定なのでペーパー作者が書くこの作品をおねがいします。

プロローグ（前書き）

どうも hedgehog という者です。

この作品が初投稿となります。ですので変な表現、書き方がありましたらどんどん言ってください。そういった言葉が作者の力の源となるのでおねがいします。

この小説は SAO でユニークスキル使いが二人ではなく三人目がいたら？という作者の妄想全開のものなので気に入らない所があると思います。が暖かい目でみてください。

注：作者は学生なので不定期更新となります。すみません orz

プロローグ

浮遊城アインクラッド……

無限の蒼穹に浮かぶ巨大な石と鉄の城。

城の攻略中の第5層の安全エリアにて光を受け付けられないような漆黒の髪、燃え上がるような灼眼をもちさらに左目に黒い眼帯をつけた少年は軽いノリでスキルメニューを見て素っ頓狂な声を上げていた。

「うえっぶー!!」

安全エリアにいた疲れが限界にきているほかの奴らが血走った目で睨んできた。俺は軽く笑いながら手を振りごまかしながら言う。

「驚かしてごめん、なんでもないから」

(しかしなんでこんなものがあるんだ??)

俺が胡坐をかいて頬に肘を突き考えていると、後ろから声を掛けられる。

「どうしたハヤテ?」

全身黒づくめに片手用直剣を背負った少年キリトが心配した表情で言ってきた。俺は表情を崩し答える。

「いや別になんでもない心配ありがとうキリト。お前もここに来るまで連戦してたけど大丈夫か?」

「俺も大丈夫だ。そうだハヤテ今日一緒に夕食にいかないか?もちろん俺のおごりで」

俺はニヤリとして答える。

「俺に奢るということはさぞかし懐に余裕があると見える。覚悟するんだなキリ公」

キリトが若干顔を引きつらせる。

「お手柔らかに頼むよ……。はぁ……。防具の新調はまた今度になりそうだ」

「じゃあいきますか。でっキリト店何処にすんだ?」

「対ハヤテ奢り用味良し、量多め、なおかつ安いとっておきの店を準備してあるぜ」

すると後ろから声を掛けられる。…俺って後ろから声を掛けられること多いな

「キリ公にハヤテ、飯の相談か？俺も一緒に行っているか？」

悪趣味なバンダナを巻いて顎に無精ひげを生やした野武士ずらのクラインが言ってくる。

「「おうっいいいぜ」」

「じゃあ7時にエギルの店に集合な」

「じゃあ俺はもうちよつと経験値を稼いでから行くから先行つてくれ」

すると二人が心配そうな顔で言ってくる

「別にいいけど無理するなよ」

「おめえが死んじまつたら飯が不味くなっちゃうからよ。危なくなつたら結晶で逃げんだぞ！」

「ああ、心配すんな。じゃあ、後でな」

俺は左手を振り装備メニューを操作し愛剣の細剣を腰に付け心配している二人を背に走り出した…

ブログ（後書き）

誤字脱字おかしな所があればコメントお願いします。

こんな風にするといいいかなどをこのペーパー作者に教えてください。

第一話 エクストラスキルそしてS級食材入手

俺は第74層の迷宮区にて<デモニツシュ・サーバント>という骸骨剣士と戦闘していた。こいつ全身骨のくせしてやたらと筋力パラメータがやたらと高い。そういう所はご都合主義だな茅場…ここまでリアルだったらちゃんとしようぜ。

今日の初戦闘ということもあり、敵の動きを観察するように足を運び、攻撃を回避する。

するとデモニツシュ・サーバントの持っている長い直剣がライトエフェクトを帯びる。(あの初動のモーションは…<バーチカル・スクエア>！)

このソードスキルは左右のステップで避けるのが一番だが俺はあえてデモニツシュ・サーバントのライトエフェクトを帯びて振り上げて空いた脇に向かってダツシュする。俺は敏捷度に多く振ってあるだけあって楽に後ろに周り込むことが出来た。

「よっしゃ、実験成功！これから反撃開始だ」

俺は愛剣の細剣を構えて細剣術の基本技<リニア>を放つ。もともとスキルを外し体勢を崩していたデモニツシュ・サーバントはそのままよろける。その隙についてソードスキルのモーションをとる、すると細剣に純白のライトエフェクトを帯びる。高速の八連撃<スター・スプラッシュ>そのすべての剣先を弱点である首と胴体の付け根に当てる。

八連撃全て当てきると、デモニツシュ・サーバントは不自然な格好で固まる。すると系の切れた人形のように崩れ落ちポリゴン片に姿を変える。

「ふう。とりあえず一体倒したか…。それにしても腹減ったな。なんか飯になりそうなモンスター現われね〜かな？」

そういいながら鼻歌を歌っていたら、不自然な音が聞こえた。俺は聞き耳スキルと索敵スキルを一緒に使う。すると木の木陰に隠れていたS級のレアモンスター<ラグー・ラビット>たしかこいつの肉はプレイヤー間での取引で10万コルはくだらないが俺にはそんなこと関係なかった。こいつの肉は絶品と評判で美味に餓えているこの世界では最大の幸福とも言えるだろう。

特に食欲旺盛な現在17歳の俺にはたまらない。逃げられないうちに手早く装備メニューとスキルメニューを操作する俺はみんなに隠してる奥の手エクストラスキル<銃>を使う。

<銃>は剣が支配するSAOの中では絶対にのけものとされるかどうかやって入手したのかなどの質問攻めに合いそうなので人前での使用はやめている。<銃>の中でも色々種類があり熟練度を上げることにより使用可能な銃を増やすことが出来る。<銃>最大の長所は遠距離での攻撃が可能だということ、そしてなにより使用できる銃の種類、弾の種類が豊富だということだ。

俺はその中でも一番使い慣れているホワイトシルバーの輝きを持つ拳銃<ラグナロク>を構える。

銃スキル基本技<シングルショット>を放つ。放たれた弾丸が蒼いライトエフェクトを帯びて<ラグー・ラビット>のもとへ吸い込まれるように飛んでいく。

攻撃がヒットしみるみるHPバーが減少していきゼロになったら<ラグー・ラビット>はポリゴン片となって砕け散った。

急いでメニューを操作し獲得したアイテムを確認する。アイテム欄の上には確かに<ラグー・ラビットの肉>の文字を確認した。そして込み上げてきた気持ちを開放した。

「いやっほ~~~~~い!!!!!!」

喜ぶだけ喜ぶと俺はすばやくメッセージを打ち送信する。もちろ

ん俺が知っている中で最高の料理人に。するとすぐに返事が返ってきた。

「返事の結果は何じゃろな」

f r o m : アスナ

すぐにくセルムブルグ>の私の家にエギルさんと一緒にきて。

同じ食材をキリト君が持ってきてるから、あともうちよつと食材よろしく！

ハヤテ君が来るんだつたら足りなくなつちゃうからね。

「むむつ！何故にエギルのヤローも一緒なんだよ」

お抱え料理人の機嫌を損なわないようにくアルゲード>に転移結晶を使う。もつたない思いがあるがしょうがない。

「転移！くアルゲード>！」

たどり着いた店にはclosedの板が架けてあるがそんな物関係無い、俺は筋力パラメータの許すかぎり思いつきり木で作られたドアを蹴りつける。そうすると中から強面フェイスの巨漢店主が出てきた。

「このやり方はハヤテだな！？ノックかメツセージを飛ばせよ！もうアスナちゃんからメツセージをもらったからもう少し待ってる！」

「すげえ肺活量だなおい」

「反応するところか！？」

「はいはい十分以内に準備しろよ？俺は準備するもんがあるから転移門集合な！」

そついうと食材を入手しに市場にむかった……

第一話 エクストラスキルそしてS級食材入手（後書き）

誤字脱字等がありましたらコメントでおねがいします。

モンスターの弱点などは勝手に設定しています。

一話、一話が短いのは作者の能力と小説に費やす時間が少ないせい
です・・・

こんな作者ですが応援おねがいます

第二話 ラグーラビットフルコース前編

「おいっ自分で言っというて遅いじゃないかハヤテ」

「悪い、悪い。市場で食材買ってたら結構いい食材がたくさんあったから目移りしちまった」

そういうとエギルが顔を緩ませながら言う

「ハヤテが目移りするほどの食材がたくさんあったのか。いや、今日の飯はアスナちゃんの手作りだし楽しみだ」

俺達は軽い話をしてから転移門に踏みこんだ。

<セルムブルグ>は、街の規模は<アルゲード>とあまり変わりはないが六十一層は大きな湖の中心に浮かぶ小島に存在する。街は華奢な尖塔を備える古城を中心とした市街は全て白亜の花崗岩で精緻に造り込まれ、ふんだんに配された緑と見事なコントラストを醸し出している。

俺とエギルの二人はこの美しさにしばしの間心を奪われ見入っていた。それもそのはず夕暮れということもあって暖かなオレンジと深い紫色が入り混じっていたからだ。それほどにこの景色は幻想的でそしてとても美しかった……

「いい街じゃねえか。まあ<アルゲード>ほど心に染みるようなものは無いがな」

エギルがしみじみと言っていた。

「よしっ！景色も堪能したことだしアスナん家にいくとするか」

「おうよー！」

アスナの住む部屋は、目抜き通りから東に折れてすぐのところにある小型の、しかし美しい造りのメゾネットの三階だった。エギルは豪華な雰囲気にはやられていた。

「何すくんでんだエギル？別に気にすることねえだろ」

「だ、だつてようハヤテ。俺こついつた場所は苦手で」

俺はエギルの巨漢を押しつけてドアを思いつきりノックした。

「おいハヤテ、なんでアスナちゃんの家はちゃんとノックしてんだ？」

「何言つてんだ女の家ではマナーを守るよ俺だつて」

そついうとエギルが軽く呆れていた。

するとドアがゆっくりと開かれる。すると期待外れの全身黒ずくめのキリトが現れた。俺ら二人は会つてそつそつ溜め息をついた。

「はあ~~~~」

俺らの溜め息はアインクラッドの第一層まで届く勢だった。

「ヒドッ！会つたそつそつそれは無いだろお前ら」

「マジ空気読めよキリト」

「キリトお前には失望した」

すると後ろから栗色の髪の毛を揺らしながらアスナがやってきた。アスナをみた瞬間俺らの暗かった雰囲気は一掃されていた。

「いらつしゃい、ハヤテ君にエギルさんにキリト君も玄関で話すんじゃないで話したら？」

「ああ、そつだな」

「そんじゃおじゃましま~~~~す」

「おじゃまします」

そついうと俺達はアスナの家に入っていった。

第二話 ラグーラビットフルコース前編（後書き）

今回はホントに短くなってしまいました。

この話を執筆しているうちに終わりが見えなくなってきたので途中で切らせていただきました。

ホントにすみませんorz

誤字脱字等があったらおねがいます！！

第三話 ラグーラビットフルコース中編（前書き）

第二話に続く中編です。

なぜ三つに分けたのかというと作者の力が無いからです。

本当にすみません。

ではでは、どじろ

第三話 ラグーラビットフルコース中編

アスナの部屋の中は、広いリビング兼ダイニングで隣接したキッチンには明るい色の木製家具がしつらえられ、統一感のあるモスグリーンクロス類で飾られている。全てが最高級のプレイヤーメイドだろう。

一目見ただけで、女の子の部屋だとわかる。ゲームの中だということに女の子特有の甘いにおいがしたような気がしたからなおさらだ。

俺とキリトは、遠慮なくふかふかのソファに座り込む、キリトはさっきまで読んでいたのだろう新聞を手に取り読みはじめ。俺は再び立ち上がりアスナが作業しているだろうキッチンに向かおうとする。すると、巨漢が挙動不審に辺りをキョロキョロとしては、そわそわとしていた。

「おいコラ、エギル。拳どってる暇があるんなら、普通に座ってるよ」

「だってよ。ゲームの中で女の子の部屋に入ったもんでついな……」
するとアスナがキッチンからやってきた。アスナの格好は簡素な白いチュニックと膝上丈のスカートという服装だった。自然とアスナの健康的な生足に男性陣の視線がいつてしまう。

「ちょうどいいときに来た みんなでフルコース前の食前酒でも飲まないか？実は家からとっておきのを三本ほど持ってきたんだ」

そういつて全員を見ると目を輝かせていう。

「いいのか、そんな貴重な物を飲ませてもらっても？」

「ハヤテ君のとっておきだったら味はもちろん。しかもかなり高いだろうからなんか悪いよ」

「遠慮なくいただこう」

「キリト君少しでも遠慮しようよ…」

「お前ら…口では遠慮してても顔がそうは言っていないぞ…。まあいや量が少ないから独り占めは気が引けるから一緒に飲むだけだ。それとなかなかいい効果があるから楽しみにしとけ！」

そういうと全員声を合わせて

「~~~~~はい~~~~~」

俺は食前酒として持ってきた一人お猪口一杯で無くなってしまったような小さめのビンを開ける。するとベリーののような甘酸っぱい匂いが香る。その匂いを嗅ぐと全員の顔が緩まる。全員分注ぎ終わるとビンがポリゴン片となつて手元から消えつせる。

全員が手に持ったことを確認すると

「そんじゃいただくか？」

そういうと全員一斉にお猪口に口をつける。匂いと同じ甘酸っぱい味が口いっぱいに広がる。

「食前酒はこうじゃねえとな」

「「すげえうめえ!!」「」

「なにこれすごい美味しい」

すると全員の前にメッセージが現れる。そこには…

message

アイテム<アイスベリーカクテル>の効果により5ポイントだけ選択可能なスキルに振る

ことが出来ます。今すぐ行いますか？」

YES / NO

の文字を見た瞬間全員が目の色を変える。

「「「なんじゃこりや〜〜〜〜!?」「」」

俺は自慢げに

「どうだこれが俺のとおきのおきの一つだ。驚いたか？
するとキリトがこわばった顔で言った。

「なんちゅーもんを持ってんだお前は」

エギルは興味深そうに聞く。

「どうやって手に入れたんだ？ぜひ教えてくれ」

アスナは呆れ気味で

「ハヤテ君は…すごいはずいんだけど。なんか納得できない」

おのおのほ言いたいことを言うとはくほくとした顔でスキルウイ
ンドウに振っていく。これだけだと思うなよ？こんなことがこれか
らじゃんじゃん起こるなんて夢にも思っまい。

俺はメニューを操作すると、アスナの家に来る前に買ってきた
食材たちをテーブルに置く。これだけの食材があつてしかも料理人
がアスナだったらどんなフルコースになるか想像もつかない。考え
ただけでも口の中に涎が溜まるのがわかった。

「アスナ！メインはくラグー・ラビットであとの前菜やらはここ
にある食材を使ってくれ。」

「こんなに食材買ってきたの!?しかもすごいレア食材ばかりだ
し…まあいつか。ハヤテ君だからで説明つくし…。それじゃ、みんな

な。何を希望ですか？」

「「「シェフのお任せコースでおねがいします」「」

「こうしてメニューが決まったのだった。

第三話 ラグーラビットフルコース中編（後書き）

なんてこった…

文才が無さ過ぎる。そして時間が無さ過ぎる。

エギルは原作ではかわいそうなので、登場させちゃいました。

誤字脱字等がありましたらコメントおねがいます。

第四話 ラグーラビットフルコース後編（前書き）

ラグーラビットフルコースとうとうこれで終わりです。

作者の文才がないせいで長くなってしまいました。

すみませんorz

でわでわびじぞぞ〜

第四話 ラグーラビットフルコース後編

メニューがくシェフお任せコースで決定した俺達は、まず俺とアスナはキッチンに向かいエギルとキリトはなんとなくメニューの操作を行っていた。ちなみに俺はキッチンには行つたが、料理スキルはびたいち上げてはいない。でも自分で買ってきた食材の生かし方を知っているつもりだ。だからアスナに調理の指示を出しに来たのだ、料理のことに關しては、アスナは俺に信頼をおいてくれている。料理人の腕は最高だから不味い料理ができる訳が無い。

ということ、まず前菜の指示を出す。最初に使う食材の名前は<スモークキング・オクトパス>これは燻製されたような香りをもっている、サラダで楽しむのが一番だ。

「アスナ！そのタコは、そのレタス？と玉葱？とをあえてその果実を絞ってサラダにしてくれ」

「了解！」

デザートまでの仕込みを終えてとうとうくラグー・ラビットを
使ったメインディッシュにとりかかる。

「ハヤテ料理長！メインディッシュはどうしますか？」

アスナが次の指示を待つ。

「そうだな？日本語で煮込みウサギって書くから煮込み料理…
ブラウンシチューにするなんてどうだ？」

「そうだね。ハヤテ料理長の指示に従います」

アスナが作業を始めて調理時間残り五分の文字を確認するとアス
ナに言葉をかけキッチンを出る。

「アスナ！俺はもう戻ってるからできたら呼んでくれ。キリトとエ
ギルに運ばせるから」

「ふふっ。わかった」

俺はキリトとエギルが待つリビング兼ダイニングに向かう。する
と二人は待ちくたびれてだれていた。キリトが腹が空きすぎて涙目
になった目で言う。

「ハヤテ。まだか？」

「アスナちゃんすっごいうまいよ」

「私がすごいんじゃないよ。ハヤテ君の指示が的確ですごかったんだから」

「ぼら、ぼらぼ（そりゃ、どうも）

「「「お前がつつきすぎ」「」

全員がデザートまで完食すると。ラストの飲み物を取り出す。すると三人が

「「「待ってました！！！」「」

目を輝かせていた……………

とっておきの紅茶に似た何かを飲み終えていっぷくしたところで

「「「うまかった」「」

「おいしかった」

するとまたもやメッセージが現れ俺を除く三人がびっくりする。その顔を見て俺は自分でもわかるほどあくどい笑み浮かべる。そのメッセージは…

message

今食べたコースの効果の合計に

より以下の効果が得られます。

- ・筋力値パラメータ+5
- ・敏捷値パラメータ+7
- ・スキルポイント+30を振り分けることができます

きます

「」「」.....「」「」

「なんだよ。お前らその目は？」

「」「」はあ~~~~~「」「」

その溜め息は最初の俺とエギルとの溜め息を越えるほどだった……
がんばってここまでやってきたのに褒められなかったのはなぜだ
ろう？

「料理で身体を作るとは正にこのことだ」

「お前も相変わらずむちゃくちゃなことしやがるなハヤテ」

「お前こついつアイテムの情報をどこから手に入れやがるんだ？」

「ハヤテ君……だからね……しょうがないよね」

「うおーい！アスナ。目からハイライトが消えてるぞ！？」

まあ何はともあれ俺らの最高の夕食の時間がこうして終わったのである。

第四話 ラグーラビットフルコース後編（後書き）

がんばった。でも中身が伴ってない!?

今までで一番の長文となりました。

無駄に伸ばしたな駄文なのに…

御見苦しい文章で誠にすみません。

これからはハヤテのエクストラスキルをどんどん使っていく予定です。

ここで悩みを一つそれは…

ヒロインを誰にするか？

やっちゃいけないだろ!?!考えずに始めるからこうなるんだよ。

というところでこれから学校の友人との話し合いによって決定しよう
と思います…

それでは長くなりましたがこの辺で〜

誤字脱字等がありましたらコメントをおねがいしますorz

第五話 青い悪魔ザ・グリーンアイス

「キリト君、早く！軍の人たちが危ないよ」

アスナにそう言われると、暴食黒眼帯のハヤテに向けて簡易メッセージを送信する、今回の敵をこの人数でやるのは、もし俺があの技を使ったとしても倒せるかわからない…

するとすぐに返信が返ってくる

message

今すぐ向かうからさっさと軍のアホどもを助けに行け！

そのメッセージを確認すると俺は、ボス部屋の前でそわそわしているアスナとクライン率いるギルド<風林火山>に言う。

「ハヤテがすぐに来るから今からボス部屋に突入するぞ」

「おうよ。その言葉を待ってたぜキリ公！お前ら行くぞ！」

「~~~~~」

アスナがボス部屋を開け全員が中へ入る。そこは、さっきアスナと入った時とは全く違う地獄絵図だった……

床一面、格子状に青白い炎が噴き上げている。その中央でこちらに向けて屹立する、金属質に輝く巨体、青い悪魔ザ・グリーンムアイズだ。

禍々しい山羊の頭部から燃えるような呼気を噴き出しながら悪魔は、右手の斬馬刀とでも言うべき巨剣を縦横に振り回している。まだHPバーは三割も減っていない。その向こうで必死に逃げ惑う、悪魔と比べて余りにも小さい影。軍の部隊だ。

もう統率もあつたものではない。とっさに人数を確認するが、二人足りない。転移アイテムで離脱したおであればいいが――――
――――。

そう思う間にも、一人が斬馬刀の横腹で薙ぎ払われ、床に激しく転がった。HPが赤い危険域に突入している。どうしてそんなことになったか、軍と俺たちのいる入り口との間に悪魔が陣取っており、これでは離脱もままならない。俺は倒れたプレイヤーに向かって大声を上げた。

「何をしている！早く転移アイテムを使え！！」

だが、男はさっとこちらに顔を向けると、炎に青く照らし出された明らかな絶望の表情で叫び返してきた。

「だめだ……！　く……クリスタルが使えない！！」

「な……」

思わず絶句する。この部屋は<結晶無効化空間>なのか。迷宮区で稀に見られるトラップだが、ボスの部屋がそうであったことは今まで無かった。

「なんてこと……！！」

アスナが息を呑む。これでは迂闊に助けにも入れない。その時、悪魔の向こう側で一人のプレイヤーが剣を掲げ、怒号を上げた。

「何を言うか……ッ！！　我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない！！　戦え！！　戦うんだ！！」

間違いなコーバツツの声だ。

「馬鹿野郎……！！」

俺は思わず叫んでいた結晶無効化空間で二人いなくなっているということは……死んだ、消滅したということだ。それだけはあってはならない事態なのに、あの男は今更何を言っているのか。全身の血が沸騰するような憤りを覚える。

俺達が斬り込んで連中の退路を拓くことはできるかもしれない。

だが、緊急脱出不可能なこの空間で、こちらに死者が出る可能性は捨てきれない。あまりにも人数が少なすぎる。俺が逡巡しているうち、悪魔の向こうでどうにか部隊を立て直したらしいコーバツツのこえが響いた。

「全員……突撃……！」

十人のうち、二人はHPバーを限界まで減らして床に倒れている。残る八人を四人ずつの横列に並べ、その中央に立ったコーバツツが剣をかざして突進を始めた。

「やめろ……っ……！」

だが俺の叫びは届かない。

余りにも無謀な戦いだっただ。八人で一斉に飛び掛っても、満足に剣技を繰り出すことができず混乱するだけだ。それよりも防御主体の態勢で、一人ずつダメージを与え、次々にスイッチしていくべきなのに。

悪魔は仁王立ちになると、地響きを伴う雄叫びと共に、口から眩しい噴気を撒き散らした。どうやらあの息にもダメージ判定があるらしく、青白い輝きに包まれた八人の突撃の勢いが緩む。そこに、すかさず悪魔の巨剣が突き立てられた。一人がすくい上げられるよう

に斬り飛ばされ、悪魔の頭上を越えて俺たちの眼前の床に激しく落下した。

コーバツツだった。

HPバーが消滅していた。自分の身に起きたことが理解できないという表情のなかで、口がゆっくりと動いた。

.....有り得ない。

無言でそう行った直後、コーバツツの体は、逆撫でするような効果音と共に無数の断片となって飛散した。余りにもあっけない消滅に、俺の傍らでアスナが短い悲鳴を上げる。

リーダーを失った軍のパーティーはたちまち瓦解した。喚き声を上げながら逃げ惑う。すでに全員のHPが半分を割り込んでいる。

「だめ……だめよ……もう……」

搾り出すようなアスナの声に、俺はハツとして横を見た。咄嗟に腕を掴もうとする。

だが一瞬遅かった。

「だめーーーーーッ!!」

絶叫と共に、アスナは疾風の如く駆け出した。空中で抜いた細剣と共に、一筋の閃光となって突っ込んでいく。

「アスナッ!」

俺は叫び、やむなく抜剣しながらその後を追った。

「どうとでもなりやがれ!!」

クラインたちがときの声を上げつつ追隨してくる。

そうして俺たちは、軍のパーティーを助けるために駆け出していた。

第五話 青い悪魔ザ・グリーンアイス（後書き）

遅くなりました

せつかく一日ごとのペースを保とうと思ってたのに…

学校でいろいろあって進路関係で時間を奪われました。

これからも執筆する時間が短いことから更新が遅くなるかもしれません。

とつぜんですが、後書きを書いている時にどこういう風に書けばいいのかわかりませんから後書きでさえもこのような駄文になってしまっています……

ってか、ただの言い訳じゃね!?

この駄作者に伝授してくださいOTL

今回ハヤテが一回も出ていない!?!次回必ず出す予定です……たぶん

誤字脱字等があればコメントおねがいします。

プチ休載のおしらせ(前書き)

どうも軽く凹み気味のhedgengerです。

凹み気味な理由は

プチ休載のおしらせ

先日パソコンを使おうとして電源を入れてからお気に入りの小説を読んでみるとなんと……

ただいま休止中の文字が!!

なんてこった…休止中じゃねえよホント。

というところで…電気屋さんに早速GO!!!

結果はというところ……

電気屋の店員「基盤が駄目になったので、修理するか新しいのを買

うかのどちらかですね」

headset08「……………はい。」

電気屋の店員「修理には五万円ほどかかります」

headset08「考えさせてください……」

電気屋の店員「ありがとうございます。またのご利用お待ちしております」

UJIN読むつてreadset08では……

headset08「どうだった？」

headset08「パソコンが逝きました」

headset08「じゃあどつすんのよ」

headset08「五万円で修理するか買い換えるかだそつです」

headset08「しょうがないから買い換えましょ。あんたが

家の中で一番機械に強いんだから、七万以内で良いの探して！」

hedgghog「了解しました」

hedgghog「年末にとんだ出費だわ……」

ということでもパソコンを買い換えてデータ移すまで休載させてもらいますorz三

プチ休載なのでいやホントに書くのがめんどいからとかじゃないんだからね!!!

こんな駄文を読んでくださっている心優しい皆様本当に申し訳ありません。一刻も早く復帰するのでどうか見放さないでください。

orz

第六話 眼帯の秘密（前書き）

余りにも早くパソコンが新しくなったのでうれしいから書いてあげました。

流石にデータを移行するのは年明けになりそうです………

てへぺろっ

という事で……本編にGO!!

第六話 眼帯の秘密

「悪い。準備に時間がかかった！」

俺がボス部屋に入ると、キリトが一人で青い悪魔ザ・グリーンアイズと戦っていた。キリトは、何かを決心したような顔をしてクラインとアスナに声をかけていた。

「アスナ！クライン！十秒だけでいい持ちこたえてくれ」

「キリト！俺がブレイクポイントを作るから待ってけ」

「ハヤテ！？遅かったじゃねーか。そんじゃ頼む！」

そういうと俺は、装備メニューから血のように紅く染まったショットガン<ガラム>を取出し、弾は散弾を入れるのではなく作るのが難しいとっておきの徹甲榴弾をこめ、左目の眼帯を勢いよく外す。

こっちを見ていたクラインが驚きの表情を見せるが直ぐに敵の動きに目を向ける。たぶんクラインは、俺の左目と装備を見て驚いたのだろう。

俺はエクストラスキル<神眼>を発動させる。この<神眼>は、

五つの能力を持っている。まず一つ目の能力 サーチ を使い敵のウィークポイントを探す……

グリーンアイズのちょうど鳩尾の辺りを示す。そこで二つ目の能力 ロック を使いウィークポイントを固定し、<ガラム>を構え銃系ソードスキル<ホーミングショット>を放つ。この技は決めた座標に必ず当たる極めて優秀な技だ。

弾はグリーンアイズの鳩尾に見事に当たり、一秒経つと大きな爆発を起こす。目に見えてHPバーが減る。その隙を逃すことなくキリトが後ろに下がり、その間にすかさずアスナとクラインが場を支える。

俺とキリトは、装備メニューを操作する。ここからは一度の操作ミスを許さない。俺は<ガラム>を戻し二丁の拳銃<ラグナロク>と純白の拳銃<ハクリュウ>を取り出し、キリトは背中にもう一本片手用直剣をだす。

アスナはれっぱくの気合いとともに凄まじい突きを放つ。俺たち二人はその隙を逃さず叫ぶ。

「アスナ、クライン。スイッチいくぞー!!」

「おつよ」

「了解」

俺は、悪魔の後ろに回り込み、前のキリトと共にソードスキルを発動させる。体全体を紅いライトエフェクトを帯びる。銃系最上位近接用ソードスキル<アルカタ>、この技は体術スキルを完全習得していなければ使えない。<アルカタ>の特徴は、数少ない近接技で、弾を打撃武器と仮定して銃を使えない隙を体術で埋めていく特殊な技だ。

前方でキリトが二本の片手剣を高速でグリーンムアイズへと降り注いでいく。その技はまるで流星のように見えた。

俺たち二人がほぼ同時に攻撃が終わるとグリーンムアイズは体を不自然な形で硬直させるとポリゴン片となって飛散した。ふと自分のHPバーを見るとレッドゾーンに突入していたことを確認すると、全身から力が抜け意識が暗転した。

少し経つと、俺は意識がすっかりしないまま考える。(石畳じゃ硬くてぐっすり寝れやしねえ……)

すると上の方から声が聞こえてきた。

『キリ公は起きたが、眼帯バカが起きやしねえな……そうだ！
！この俺様が眠り姫に口づけしてやるとするか』

(もうちょっと寝ていたい……うん？待てよ……さっき聞こえてきた言葉を思い浮かべてみよう。眼帯バカ……？……起きない？……口づけ？……クラインが？……)

「させるか！この野武士が！……！」

俺はクラインを突き飛ばすような形で跳ね起きる。突き飛ばしされたクラインがにやりと笑う……

何だか嫌な予感がして辺りを見渡す。するとキリトが石畳に正座さ

せられていた。するとクラインが言う。

「ハヤテ！キリ公の隣に正座しやがれ」

しょうがないからキリトの隣で正座する。それにしても石畳が硬くて足が痛い……

「そんじゃお前らさっきのあれはなんだ？」

「「言わなきゃダメか」」

「つたりめえだ！見たことねえぞあんなの。特にハヤテ！！」

「じゃあハヤテ俺から行くぞ」

「どうぞ……」

「……エクストラスキルだよ<二刀流>」

「じゃあ次ハヤテ」

クラインが言う。

「同じくエクストラスキル……左目が<神眼>で武器の方が<銃>だよ」

おお……というどよめきが、軍の生き残りやクラインの仲間のおいだに流れた。するとクラインが俺に言ってくる。

「キリ公はまだ剣だよ……ハヤテ！お前はなんだ。剣でも何でも

無いぞ」

「俺に言われてもな……なあキリト？」

「そこで俺に振んなよ！」

「そんでお前ら出現条件は？」

「解ってりゃもう公開してるぞ」

「解るはずねえじゃん」

「だよな〜」

クラインががっかりする。

「俺たちはこのまま七十五層の転移門をアクティベートして行くけど、お前らはどうする？今日の立役者だし、お前らがやるか？」

「「いいや。やめとく」」

「もうへとへとだし」

「っーか腹減った」

「ハヤテは相変わらずだな…：そんじゃ気を付けて帰れよ」

クラインはそれだけ言うと門に向かって歩いて行った。俺はキリトとアスナの邪魔をするのも悪いから回廊を抜けてボス部屋の外に出

ると転移結晶で帰ろうとした。すると茂みの奥から声がした。

『Wow……これは面白いものを見させてもらった。イツツ・シヨ
ウ・タイムと行きたいところだが今日のところは勘弁してやるとし
よう。Bye……Lack Boy……』

とつさに眼帯を外し三つ目の能力「ズーム」を使い、声のした方を見ると暗闇に歩いていく艶消しの黒いポンチョを揺らしながら歩いて行った。ポンチョの間から見えたまるで中華包丁のように四角く、血のように赤黒い刃を持つ肉厚の大型ダガーだった。その姿は俺に強烈な恐怖心を与えた……………

「あいつは誰だったんだ？」

疑問を残しつつ俺は転移結晶を使って帰った。

第六話 眼帯の秘密（後書き）

ホントにプチ休載になってしまいましたね……

ではでは七十四層攻略が終わったのでオリジナル展開を入れたいと思います。

アンケートとらせていただきます。次の項目から選んでください。

? ハヤテをギルドに入れてみる（k o bじゃないよ）

? クラインたち<風林火山>と集団クエスト参加

? 隠しダンジョンをソロ攻略

? ハヤテの始まりの日の物語

? 第七十四層攻略記念パーティー

? リズベットとインゴット採掘ツアー

? いつものメンバーで食材狩りツアー

? キリトとの出会いの物語

? オリキャラとギルド結成（?とほぼ同じじゃね?）

? オリジナルとか要らねえからさっさと続き書きやがれ

以上の10個です。一人3つまで選んでください。上位3つをやらせてもらいます。？か？だったらこの話がちょっと続くかも……コメントに載せてください。

こんな駄作者に救いの手をorz

誤字脱字等があればコメントおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2996z/>

SWORD ART ONLINE ~ 剣より銃を愛する者 ~

2011年12月29日16時49分発行